

『文化初級日本語 I・II 改訂版 教師用指導例集』 (PDF 収録) 作成報告

日本語科 専任教授 白石 麻子
日本語科 専任教授 武田 緑
日本語科 専任教授 前家 裕美
日本語科 専任教授 山本 文子
日本語科 専任講師 荒木 華英

・要旨

本稿は『文化初級日本語 I・II 改訂版 教師用指導例集』(PDF 収録)を作成した経緯とその基本方針について述べ、その後、本指導例集の内容、すなわち、文型の導入や練習、本文の指導などについて具体例を挙げながら説明したものである。本指導例集は、授業でどのように教師と学習者とのやりとりが行われるのか、授業が展開していくのかがイメージできるように作成されている。

・キーワード

PDF 形式の指導例 導入 練習 教材 教師の言葉 学生の言葉 スクリプト

1. 本指導例集作成の経緯と基本方針

1-1. これまでの教師用指導手引き書について

『文化初級日本語 I・II 改訂版 教師用指導例集』(PDF 収録)作成のプロジェクトは『文化初級日本語 I テキスト改訂版』『文化初級日本語 II テキスト改訂版』(以下『テキスト』)作成のプロジェクトとともに 2010 年 4 月にスタートした。それまで使用されていた『新文化初級日本語 I』『新文化初級日本語 II』には、それを使って授業を行う教師のための『新文化初級日本語 I 教師用指導手引き書』『新文化初級日本語 II 教師用指導手引き書』(以下『教師用指導手引き書』)があった。この『教師用指導手引き書』は、「新文化初級日本語の各項目をどのような視点でとらえ、どのような意図で提出したのか、また、授業を行う際にどのような点に留意すればよいかを紹介」するために作成されたものであった。

たとえば、『新文化初級日本語 I』第 9 課文型 4「～てもいいですか」の項目を見てみると、『教師用指導手引き書』には、次のような説明が載っている。

- ・ 許可を求める表現「～でもいいですか。」を学習する。
- ・ 「～でもいいですか。」という質問に対して、それを許可する場合は「～でもいいです。」ではなく、例文1)のように「いいですよ。」で答えるように指導する。
- ・ 許可を求められて断る場合については、二つの断り方を練習する。教師が学生に対して規則に基づいて許可を与えない場合は「～てはいけません。」を使うのに対し、個人の好みや判断に基づいて断る場合は例文2)のように「～はちょっと…」といった答え方をするように指導する。

また、本文については、本文中の確認すべき表現について指導のポイントが記述されていたが、今回作成の本指導例集にあるような本文の授業の流れや授業で扱うべき項目についての記述はなかった。

このように、これまでの『教師用指導手引き書』には授業の際に教師が心得ておくべきポイントが示されていたが、どのような教材を準備し、どのような流れで授業を行うのか、また、どのような言葉を使って導入し、どのような形で練習をすることができるのかなどの例は具体的には示されていなかった。そのため、文型の授業をする際には、それぞれの教師がこの『教師用指導手引き書』を読んで指導のポイントを理解した上で、自分なりの導入の方法や教材、練習の種類、それぞれの練習で使う cue などのすべてを自分でゼロから考えなくてはならなかった。また、本文の授業をする際には、授業の流れはもちろん、どの程度詳しく説明し、どのような練習をするかをそれぞれの教師が判断しなくてはならなかった。

授業の進め方や指導の内容をすべて考えていくことは教師一人一人の力量を高めるためには役立つであろうが、特に経験の浅い教師にとっては、実際の授業でどのような教材が必要になるのか、どのような言葉で導入をすればよいのか、練習はどの程度行えばよいのか、何を板書すればよいのか、学習者はどのような反応をするのかなど不安に思う部分があったのも事実である。

今回、『文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ改訂版 教師用指導例集』を作成するにあたり、新しい指導例集に盛り込むべき項目や内容、教師が望むものについて、作成メンバーの中での話し合いはもちろん、本校の若手の教師や非常勤教師からも聞き取り調査を行った。そして、指導例集の方向性を決めるために様々な角度からの検討を重ねた。その結果、新しく作成する指導例集は、経験の浅い日本語教師にも、また、初めてこのテキストを使って授業をする教師にも、授業の進め方を十分に具体的に伝えることができるよう記述することにした。この目標に向かって、次のような基本方針のもとに指導例集の作成を行った。

1-2. 本指導例集作成の基本方針

『文化初級日本語Ⅰ テキスト改訂版』『文化初級日本語Ⅱ テキスト改訂版』の目標は「文法を正確に理解する力」「相手が言いたいことを理解する力」「自分が伝えたいことを表現する力」をつけることである。この目標に向かって、私たちは授業で「学習者同士、また教師と学習者が互いに対する理解を深めるコミュニケーション」を大切にしたいと考えた。

そこで本指導例集は、「学習者が自分のことを話したい、他の人の話を聞きたいと思う授業」を常に意識して作成に臨むことにした。

本書の題名は「教師用指導手引き書」ではなく、「指導例集」である。「指導例集」という名称にしたのは、本書がこれまでの『教師用指導手引き書』のように授業で説明すべき内容、授業の際に教師が心得ておくべきことを記述するだけではなく、どのような教材を使って、どのような言葉で授業を進めていくかを具体的に示すことを目指した結果である。ある授業を具体的に記述するということは、そのクラスで教える学習者⁽¹⁾を思い浮かべ、その学習者に向けてどのような言葉で何を使って導入するか、どのように板書し、どのような cue を出して練習していくのかなどを実際に授業で行っている手順に従って書くということである。つまり、このことは私たち本校の教師が実際に行っている授業を文字にして再現することでもある。作成メンバーである本校の教師たちは、それぞれ自分らしいやり方で授業を行っていて、導入、練習、板書などにも様々なバリエーションがある。したがって、これが必ず標準的と言える授業の形があるわけではない。本指導例集を作成するにあたっては、1つの指導例にどの程度までそれぞれの教師の個性を反映することが可能かについて難しい課題があったのも事実である。この課題を解決するために、それぞれの文型や本文ごとに作成メンバーの中で担当を決め、その教師が自分が実際に行っている授業の流れや内容をもとに原案を作り、それをたたき台にして作成メンバー全員が意見を出し合い、何回もの検討を重ねて完成していくという方法をとった。具体的には、出された原案について作成メンバーの中で少なくとも4～5回の検討を行って必要な訂正をした後、さらに、その指導例を読んだメンバー以外の教師からのフィードバックや、指導例にそって授業を行った教師からのフィードバックなどを生かして、1つずつの指導例を完成していった。

指導例の中に出てくる言葉については、できるだけ学習対象の課までで既習のものを使って導入や練習ができるよう努めて記述した。これらの指導例には、本校の教師が日々行っている授業の実際がほぼそのまま反映されており、教師と学習者とのやりとりが具体的にイメージできるよう、教師の言葉、予想される学習者の言葉がスクリプトの形で記述されている。

このようにして完成した指導例は、テキストで扱っているすべての課のすべての文型、すべての本文などをカバーしており、その数は合わせて285に上る。これらの指導例をPDF形式のデータにし、CD-ROMに収めた。

2. 文型の指導

2-1. 文型の指導例について

文型の指導は「導入」、「練習」の順に進めていくが、その際、「板書」や指導上留意すべきことがらを心得ていることも必要になる。ここでは、文型の指導例に出てくる「導入」、「板書」、「練習」、「留意点」のそれぞれについて述べる。

「導入」では、学習文型がよく使われる場面を選び、その文型の意味や使い方をやりとりしながら理解させたり、絵や実物などを使って理解させたりする。基本的に導入にはあまり時間をかけない。導入の際は新出語をできるだけ使わず、既習文型を用いて説明するようにしている。1つの例だけではわかりにくいと思われる場合は複数の例を挙げて示している。本指導例集では、導入はどのような種類のものであっても、すべて教師と学習者とのやりとりがスクリプトの形で書かれており、その際、教師が提示する教材や動作、予想される学習者の反応なども記述されている。導入に書かれたやりとりは、本校の教師の経験をもとに検討を重ねて考えた、本校の授業で想定される内容である。これらのやりとりの場面や語彙などは、本指導例集を使う教師がそれぞれ指導する地域や学習者、あるいは個性に合わせたものにアレンジして使うことが望ましい。

「板書」では、学習項目の文型を提示し、ポイントになる部分を視覚的に示し、確認する。練習の際に必要な応答の例などを示すこともある。本指導例集では板書は第6課まではひらがなとカタカナを、第7課からは漢字を使用している。また、板書内の品詞は漢字で表記し、第6課まではルビが付けてある。本校で第7課を学習する頃は漢字学習が始まる時期であり、漢字に慣れさせるためにもその時期から板書に漢字を使用することにした。しかし、本校でもその時々学習者に合わせて、第7課以降もひらがなやカタカナのみで板書することもある。

「練習」には、段階を踏んで学習項目の文型の定着を図るための形のドリルから、自分のことを話すもの、テキストにある練習 a、b、c…などいろいろなタイプのものがある。文型に応じて様々な練習を行い、最終的には自分のことが話せるようになることを目指して練習していく。形のドリルとしては、活用の練習、言葉を入れ替えて言う代入練習、○や×を示して肯定や否定の文を作る練習、2つの文を文型で繋げて言う練習などがある。テキストにある練習 a、b、c…については、どのようにして練習すればよいか説明を加えたものもある。また、自分のことを話す練習としては、「昨日、～へ行きました。それから～をしました。」「～が好きです。」のような簡単なものから、「将来、～たいです。」「日本へ来る時、母が～ように言いました。」「子供の時、～てもらいました。」「日本へ来る前は～ませんでした。日本へ来てから～ようになりました。」など、できるだけ多く学習者同士が自分のことを表現する練習を組み入れている。このように自分のことを話すことによって学習者同士が互いに理解を深めることもできる。実際の授業では、自分のことを話す時には、どうしてもテキストに出ているもの以外の言葉が必要になることがある。そのような場合は、テキストに出ていなくても学習者に必要だと思われる言葉は適宜紹介し、学習者が自分が言いたいことをできるだけ表現できるようにしている。

「留意点」は、授業をする際に教師が理解しておくべきポイントや注意すべきことがらを記述したもので、ほとんどの指導例の最後の部分に載っている。ここには学習項目の文型とよく似た文型との違いについて学習者から質問を受けた場合の答え方や、本指導例の中に記述されたもの以外に、定着を図ったり発展的に使ったりするための教材の例なども載っている。

2-2. 文型導入の例

文型を教える場合、導入でその文型が使われる状況や意味などを学習者にわかりやすく説明することが重要であることは言うまでもない。

ここでは本指導例集で扱っている文型導入の実際を、6つのパターンに分けて紹介する。「絵を使った導入」「写真を使った導入」「物を使った導入」「実演による導入」「学生を動かして行う導入」「やりとりだけで行う導入」である。便宜上6つの文型導入のパターンに分けてあるが、指導例の中にはいくつかのタイプの導入を組み合わせで行っているものもある。

2-2-1. 絵を使った導入

絵を用いて視覚的に文型の理解させる導入である。絵は伝えたいポイントを絞って視覚的に明確に示すことができる。また絵には動作が行われる方向や順番、上下関係などを一目でわかりやすく示すことができるなどの利点がある。

以下は第31課文型5の「受け身」を、絵を使って行う導入の例である。ここでは動作主と受け手が明確になるような絵を用いて導入している。

導入1

- ① 次のような絵を見せて、新出語の「叱る」を導入する。



T：子供が窓ガラスを割ってしまいました。子供が悪いことをした時、先生はどうしますか。

S：……。

T：叱ります。辞書形は「叱る」です。先生は子供を叱ります。

- ② 次のような絵を見せて、教師が自分の子供時代の話をして、話し手が直接何かをされた受身文を導入する。

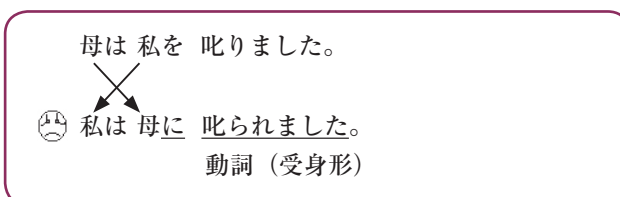


T：みなさんは、どんな子供でしたか。私はまんがが好きで、家にいる時いつもまんがを読んでいました。勉強しないでまんがを読んでいたので、よく母に叱られました。（絵を見せて子供を指し）どんな気持ちだと思いますか。

S：嫌な気持ちです。


T：そうなんです。弟とけんかした時も母に叱られました。私だけ叱られました。その時、気分が悪かったです。

次のように板書して説明する。



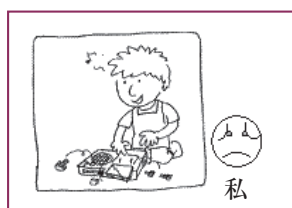
T：誰が叱りましたか。

S：お母さんです。

T：そうですね。私は嫌な気持ちでした。その時、受身形を使って「私は母に叱られました。」と言います。（板書の  と受身形を指して）誰かが何かをしました。私は嫌な気持ちになりました。その時、受身形を使って言います。

- ③ 次のような絵を見せて、子供時代の話をし、話し手の物や体の一部が被害を受けた場合の受身文を導入する。

T：よくけんかをした弟は、3歳年下です。弟はいつも私のおもちゃがほしいと言いました。そして、私のおもちゃを壊しました。（絵を見せる。）私は悲しかったです。私は弟におもちゃを壊されました。



2-2-2. 写真を使った導入

写真を用いて視覚的に文型を理解させる導入である。写真を使って導入を行うと、絵よりリアルに実際の状況を学生に提示できる。特に固有の場所や人物などは写真を使うとよくわかる。また実物が手元にない場合、実物を見せるのに近い効果が期待できる。写真は絵に比べ多くの情報が含まれている場合が多いので、1枚の写真で複数の内容の文を提示したり言わせたりすることもできる。

以下は第23課文型2の「～ようになる」を、写真を使って行う導入の例である。ここでは教師が1枚の写真から1つの事柄だけではなく、複数の変化の文を言って導入している。

導入

- ① 次のような写真を見せながら、変化の表現が入った文を教師が言う。学生は変化の表現が入っていることがわかればよい。未習の言葉は適宜説明を加える。



a

b

c



d



e

(b、c、eは©The Japan Foundation)

T：(aの写真を見せて) みなさん、この写真を見てください。赤ちゃんが生まれました。かわいいですね。まだ、食べ物は食べられません。ミルクを飲むだけです。おなかが減ると、泣きます。まだ、話はできません。もちろん歩けません。いつも寝ています。

(bの写真を見せて) 赤ちゃんが少し大きくなりました。笑うようになりました。とても元気そうですね。

(cの写真を見せて) 2歳になりました。いろいろなものを食べるようになりました。ケーキも大好きです。歩けるようになりました。走れるようになりました。でも、字はまだ読めません。

(dの写真を見せて) 小学生になりました。背が高くなりました。毎日、学校へ行くようになりました。

(eの写真を見せて) 学校でいろいろなことを勉強するようになりました。本が読めるようになりました。漢字も書けるようになりました。勉強が好きになりました。いろいろなことができるようになりました。毎日、友達と遊ぶようになりました。

いろいろな変化がありましたね。「い形容詞」、「な形容詞」と名詞の変化の文は、12課で勉強しましたね。

次のように板書し、「い形容詞」、「な形容詞」、名詞の変化の文の形を確認する。

変化の表現

- 大きい (い形) → 大きくなりました。
- 好き (な形) → 好きになりました。
- 小学生 (名詞) → 小学生になりました。

動詞の変化の形を板書し、文を示しながら次のように説明する。

いろいろなものを **食べる** ようになりました。
動詞（辞書形）

歩ける ようになりました。
動詞（可能形の肯定形）

T：動詞の時は、「～ようになりました」を使って言います。
前はしなかったことを、今はします。その時は「辞書形+ようになりました」と言います。
前はできなかったことが、今はできます。その時は「可能形+ようになりました」と言います。

2-2-3. 物を使った導入

物を使ってその使い方を示したり、学生に触れさせたり、動かしてみせたりしながら行う導入である。物を使った導入では、物がどのように使われるか、何のために使われるかに注目させながら説明することができる。また、教師と学生あるいは学生と学生の間で物を移動させたり、物に触れさせたりして文型を提示することもできる。

以下は第4課文型5の「どれ」を、物を使って行う導入の例である。ここでは学生の持ち物であるかばんを使って導入している。

導入

- ① 4、5人の学生のかばんを集めておき、かばんを1つずつ持って、次のように質問する。

T：S1さんのかばんはこれですか。これですか。どれですか。

S1：その黒いかばんです。

T：この黒いかばんですか。これですか。

S1：はい、そうです。

T：S2さんのかばんはどれですか。

S2：その大きいかばんです。

T：これですね。

- ② 次のように説明をして、板書する。

T：(かばんを持ちながら) これですか、これですか、わかりません。聞きます。どれですか。

Q：〇〇さんのかばんは どれですか。

A：そのくろいかばんです。／それです。

答え方はどちらでもいいが、「それです。」という場合は、指差して言うように指導する。

2-2-4. 実演による導入

教師が学生の前で何かをやってみせたり、演じたりしてある状況を作り出して行う導入である。実演による導入は教師が行っていることに注目させ、学生の意識を教師に向けさせることができる。

以下は第16課文型1の「～んです」を、実演によって行う導入の例である。ここでは教師が目薬をさしていつもと違う状況を作っている。

導入1

- ① 目薬と「どうしたんですか。」と書いた文字カードを準備し、次のようなやりとりをして導入する。

T：（目薬をさしハンカチで目を押さえる。）

S：目、何…？

T：（「どうしたんですか。」と書いたカードを見せ、学生に言うように促す。）

S：どうしたんですか。

T：昨日から目が痛いんです。それでこの目薬を買ったんです。

ほかに、眼帯をつけたり、手に包帯を巻いて行ったりして同様に導入してもよい。

- ② 次のように板書して、相手に関心を持って説明を求める表現とその答え方であることを確認する。「あれ？ 目？ だいじょうぶですか。教えてください。（板書を指して）どうしたんですか。」「私は説明します。（板書を指して）目が痛いんです。」などと説明し、板書をリピートして読む。

Q：どうしたんですか。 ……「教えてください。」

A：目が痛いんです。 ……「説明します。」

- ③ 次のように板書に書き加え、「～んです」の前は基本体になることを確認する。

Q：どうしたんですか。 ……「教えてください。」

A：目が痛いんです。 ……「説明します。」

（基本体）

テキスト p. 180 のゴシックの部分を見て「な形容詞」と「名詞」の接続の形も確認する。

2-2-5. 学生を動かして行う導入

ある学生、またはクラス全体が教師の指示に従って動き、それをクラス全体で見ることによって、文型が使用される場面や状況を提示する導入である。学生（ある学生またはクラス全体）が教師の指示に従って動き、それをクラス全体で見ることによって文型が使用

される場面や状況をよりよく理解させることができる。

以下は第9課文型2の「～てください」を、学生を動かして行う導入の例である。ここでは教師がジェスチャーをしながら学生に指示を出し、実際に学生に行動させている。

導入

- ① 文型1の復習として、口頭や絵などでcueを出し、次のような練習をする。「～てください」でよく使われる動詞を中心にして、グループや「て形」の活用の種類などにも配慮して選ぶとよい。

T : <言う> → S : 言って

<書く／行く／聞く／押す／返す／帰る／貸す／手伝
う／取る／飲む／読む／食べる／起きる／教える／
見る／来る／する……>

- ② 次のように教師が指示し、学生が実際に行動する。

T : S1さん、来てください。(ジェスチャーなどで教師の横に来るように促す。)

S1 : (教師の横に立つ。)

T : 名前を書いてください。

S1 : (ホワイトボードに名前を書く。)

T : 読んでください。

S1 : (名前を発音する。)

T : ありがとうございます。

他の学生にも同じように行動させたり、「〇〇さんを見てください。」「教科書を読んでください。」「名前を言ってください。」など実際に行動させて、指示をする表現であることを示す。

- ③ 次のように板書して、「て形」を使っていることを説明する。

見てください。

読んででください。

動詞 (て形)

2-2-6. やりとりだけで行う導入

絵、写真、物などを使わずに、教師からの発話や、教師と学生との言葉のやりとりだけで状況を理解させる導入である。この導入では絵や写真などでは示しにくい内容、例えば、見たり聞いたりしたこと、経験したこと、意見などを学生とのやりとりを通して引き出しながら導入することができる。

以下は第21課文型1の確定条件「たら」を、言葉のやりとりだけで行う導入の例である。ここでは学生の放課後の予定などを聞きながら導入している。

導入

① 学生と次のようなやりとりをする。

T : 昨日の放課後、どこかへ行きましたか。

S1 : はい、ニシバシカメラへ行きました。

T : そうですね。今日、授業が終わります。どうしますか。
今日、授業が終わったら、どうしますか。

S1 : 今日は…アルバイトに行きます。

T : S1さんは、今日、授業が終わったら、アルバイト
に行きます。

同様に2、3人の学生に今日の放課後の予定を聞く。
話題を変えてほかの学生とやりとりをする。

T : もう〇月ですね。もう△か月日本語の勉強をしまし
たね。来年□月、皆さんは卒業します。どうしますか。
S2さん、卒業したら、どうしますか。

S2 : 国へ帰ります。

T : 卒業したら、国へ帰ります。どうぞ。

S2 : 卒業したら、国へ帰ります。

同様に2、3人の学生に卒業後の予定を聞く。
次のように板書して、指しながら説明する。

授業が終わったら、アルバイトに行きます。

動詞（基本形・過去・肯定形）

卒業したら、国へ帰ります。

T : 今、授業をしています。まだ終わっていません。でも
午後2時50分になると授業が終わります。そして次、
何をしますか、を言います。

同様に卒業後の例文についても説明する。また動詞の
形についても確認する。

2-3. 練習のパターン

「2-1. 文型の指導例について」で前述したように、文型によって様々な練習が行われるが、ここでは2つの文型の練習を取り上げ、指導例にそって主な練習のパターンを紹介する。

2-3-1. 練習の例（その1）

はじめに第20課文型7「実技試験を受けなくてはなりません。」の指導例で、練習として取り上げている①形の練習 ②前件（または後件）を与えて文を作る練習 ③自分のことを話す練習 ④テキストの例文を読む練習 ⑤テキストの練習a、b、c…の5つの練習のパターンについて紹介する。

① 形の練習

教師が口頭で cue を出し、学生に動詞などを変換させたり短い文を言わせたりする練習である。cue はその時のクラスの状況に合わせて、文字で見せることもある。

< >内が cue である。

練習

- ① 口頭で cue を出し、「～なくてははいけません」で言う練習をする。まず動詞のグループごとに行い、その後グループを混ぜて練習する。

T : < する >

S : しなくてははいけません

< 行く / 見せる / 出す / 受ける / 来る / 起きる / 帰る / 買う…… >

- ② 口頭で cue を出し、短い文で言う練習をする。

T : < 11時までに帰る >

S : 11時までに帰らなくてははいけません。

< 明日までに作文を出す / 学校を休む時は連絡する / 図書館の本を返す / 保険証を持って行く…… >

② 前件（または後件）を与えて文を作る練習

文型を使って自分で文を考えて言う練習である。ここでは今の学校生活のルールについて話す練習をするが、まったく自由に文を作るのではなく、前件を与えて言わせる。

- ③ 次のように板書し、「～なくてははいけません」を使って学校生活のルールなどについて話す。

1. 9時10分までに _____
2. 学校を休む時は、 _____
3. テストの時は、 _____
4. 学校のパソコンを使う時は、 _____

教師が次のような質問をしながら進めてもよい。

(例)

T : 何時までに学校に来なくてははいけませんか。

学校を休む時は、何をしなくてははいけませんか。

テストの時は、何をしなくてははいけませんか。

学校のパソコンを使う時は、何をしなくてははいけませんか。

③ 自分のことを話す練習

文型を使って自分のことを話す練習である。文型の授業は、できる限り、練習の最後に自分のことなどが話せるように組み立てる。ここでは自分の国や国の学校の規則について話す。

- ⑤ 次のように板書し、自分の国や国の学校の規則などについて話す。教師が学生に質問しながら進めてもよいし、学生が何人かのグループになって話してもよい。

私の国では_____なくてははいけません。
私の国の高校では_____なくてははいけません。

(例)

- T : みなさんの国では何歳から学校に行かなくてはいけませんか。
S 1 : 私の国では6歳から学校に行かなくてはいけません。
T : みなさんの国の高校ではどんなことをしなくてはいけませんか。
S 2 : 制服を着なくてはいけません。

④ テキストの例文を読む練習

本指導例集ではテキストの例文を読むことも「練習」として扱っている。授業ではテキストの例文を読んで、意味や用法を確認する。指導例では、それぞれの文型の指導の流れの中で適切だと思われるところに入れた。またテキストの例文は用法によって分けて読むこともあり、必ずしも一度に全部読むとは限らない。ここでは規則ではない用法、自分で決めたことや用事がある断る時などについて導入した後、テキストの該当部分の例文を読む。

- ③ テキスト pp. 31 ~ 32 の例文3) 4) と※の例文を読む。3) は断る時「~なくてはいけない」を使っていること、文を最後まで全部言わなくてもいいことを確認する。また、※の「~なければなりません」は「~なくてははいけません」と同じであることを説明する。

⑤ テキストの練習 a、b、c…

テキストに載っている練習 a、b、c…である。ここでは断る時に使われる「~なくてはいけない」の練習 e をする。必要に応じて練習する際の留意点についても記述した。

- ④ テキスト p. 32 の練習 e をする。まず、T-Sで例) をやる。その際、例) のように断る時には「今日ですか…。行きたいんですが、」と言うとよいことを説明し、イントネーションに注意して言う。

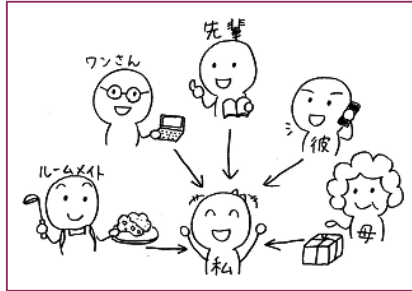
2-3-2. 練習の例 (その2)

次に第28課文型1「マリーさんが(私に)英語を教えてくださいました。」の指導例で、練習として取り上げている①絵を見て言う練習 ②プリントを使ってペアで自分のことを話す練習について紹介する。

① 絵を見て言う練習

絵を見せながら cue を出し、文を言わせる練習である。絵を示しながら cue を出すことで、行為の方向性を明確にした練習ができる。

- ① 次のような絵を見せて、口頭で cue を出し、「～てくれる」の文を言う練習をする。



- T : <よく・ごはんを作る>
 S : よくルームメイトがごはんを作ってくれます。
 T : <昨日・辞書を貸す>
 S : 昨日、ワンさんが辞書を貸してくれました。
 <いつも・日本語を教える／毎日・電話する／先週・荷物を送る>

② プリントを使ってペアで自分のことを話す練習

文型を使って自分のことを話す練習である。まずプリントを配布し、「誰がしてくれたか」を言う練習をする。次に質問を書いた紙を見せて、これまでに誰かにしてもらってうれしかったことを言う練習をする。このように簡単な内容から、過去のことを思い出して話す会話へと発展させていく。

- ② 次のようなプリントを配布し、誰がしてくれたか主語を入れて自分のことをペアで言う練習をする。

■ 誰がしてくれましたか。言いましょう。

(例) 空港まで車で送る → 父が空港まで車で送ってくれました。

1. 成田空港へ迎えに来る
2. ひらがなを教える
3. 国の食べ物を送る
4. 食事に誘う
5. 電話する

- ③ 次のような質問を書いた紙を見せ、ペアで「～てくれる」を使って自分のことを話す。最初にT-Sで次のように例を示すとよい。

1. 子どものころ、家族は何をしてくれましたか。
2. この前の誕生日に、誰が何をしてくれましたか。
3. 日本へ来てから、誰が何をしてくれましたか。

(例)

T : 子どものころ、お母さんは何をしてくれましたか。

S1 : よく公園へ連れて行ってくれました。

T : そうですか。公園で何をしましたか。

S1 : 散歩をしたり、お弁当を食べたりしました。それから、ときどき母が売店でアイスクリームを買ってくれたので、うれしかったです。

3. 本文の指導

3-1. 本文の指導例について

本文にはいくつかのタイプがある。ほとんどは会話文だが、日記、作文、説明文などもある。そのため、それぞれのタイプに合った指導例を作成したが、基本的には本文の授業は場面の確認から始まり、内容の確認、読み練習という流れで行う。ここではすべての本文の指導例にある「場面確認」「内容確認」「読み練習」と、必要に応じて載せた「練習」「発展」「留意点」のそれぞれについて述べる。

「場面確認」は、本文のCD（テキスト付属のCD。以下同じ）を聞かせる前に、テキストの絵などを使って登場人物や話している場所や状況などの説明をするものである。

「内容確認」は、基本的にはテキストを見せながら本文のCDを聞かせ、その後本文の内容に関する質問をする。本文のタイプによっては、テキストを見せずにタスクシートを配布して本文のCDを聞かせ、メモを取らせるなどして学習者の理解を確認するものもある。このようにして本文の大まかな内容を理解させた後、その本文に出てくる確認すべき表現などについて、具体的に説明をする。説明の際は、例を挙げる、学習者とやりとりをする、絵や写真を見せるなどしてわかりやすい説明を心がける。

「読み練習」は、教師のあとについてリピートさせた後、学生同士で読む練習をするものである。本文が会話の場合は、それぞれの役割を決めて練習させ、動作などをつけて発表させる場合もある。

本文によっては、この他に「練習」や「発展」などを載せた指導例もある。本文の指導例にある「練習」はテキストに載っている練習a、b、c…および本文のディスコースを使った練習などで、どちらも「読み練習」まで行った後にするとよい。また、「発展」は時間的な余裕がある場合や学生に余力がある場合に行うとよいものである。本文によっては、指導の際に教師が理解しておくべきポイントや留意すべき点について「留意点」として指導例の最後に記述した。

3-2. 本文の指導の例

本文の指導例として第7課本文1と本文2を取り上げて紹介する。

本文1（資料1参照）の場面は、留学生のラフルが財布を落としたことを学生会館の先

生に話した後、交番に行って警察官と話している場面である。場面が2つに分かれているので、指導の流れも次の指導例のように「学生会館で」と「交番で」の2つに分けて指導する。「交番で」の内容確認では、はじめに聞き取るべき項目を板書で示し、メモを取るよう指示した後、テキストを閉じてCDを聞かせてメモさせる。その後、答え合わせをしながら、学生とやりとりして、板書した項目以外の部分についても内容を確認する。

指導の流れ

〔場面確認〕（学生会館で）

テキスト p. 84 の絵を見せて、ラフルと会館の先生が学生会館で話していることを確認する。

〔内容確認〕

① CDを聞かせて、次のような質問をして内容を確認する。

Q：ラフルさんは何を落としましたか。
会館の先生はラフルの財布を見ましたか。

② 次の表現の意味を確認する。

・ そうですか…。

残念そうに話していることに気づかせ、気持ちを込めて言う練習をする。

〔場面確認〕（交番で）

テキスト p. 84 の絵を見せて、ラフルが交番で警察官と話していることを確認する。また、落とした財布について学校や会館の先生に聞いてもわからない場合は、交番に行くということを学生に説明する。

〔内容確認〕

① 次のように板書して、学生に（ ）の部分聞き取ってメモするよう指示し、CDを聞かせる。教科書は一旦閉じさせるとよい。

1. ラフルさんはどこで財布を落としましたか。
（ わかります。 / わかりません。 ）
2. ラフルさんは
どこへ行きましたか。 財布はありましたか。
① () …… (○ / ×)
↓
② () …… (○ / ×)

- ② 答え合わせをしてから、板書を使って次のようなやりとりをする。

T：ラフルさんは郵便局で何をしましたか。

S：切手を買いました。

T：そうですね。じゃあ、その時、財布は？

S：ありました。

T：そうですね。ありました。切手を買いました。

～続ける～

〔読み練習〕

クラス全体でリピートして読み練習をする。その後、ペアで練習する。

！ 留意点

- 本文にある「部屋の中を捜しましたか。」の「を」は「探す」という動作の対象となる場所を示している。ここでは状況が理解できればよい。

本文2（資料2参照）は、交番でラフルが警察官と落とした財布について話し、遺失物届けに記入している場面である。まず、場面確認では本文1の続きであることを確認する。内容確認は前半と後半でやり方を変えて指導する。前半はタスクシートを配り、テキストを閉じてCDを聞かせて答えを書かせる。後半はCDを聞かせた後、内容についての質問をする。その後全体を通してCDを聞かせ、確認すべき表現を説明する。読み練習をペアで練習させる際は、実物（紙、ボールペンなど）を使って行うとよい。

指導の流れ

〔場面確認〕

テキスト p. 84 の本文1 を開かせ、交番でラフルと警察官が落とした財布について話していたことを確認する。本文2がその続きであることを伝え、テキストは閉じさせる。

〔内容確認〕

- ① 次のようなプリントを配布し、学生に正しいものを選ぶように指示する。「クレジットカード」は未習なので、キャッシュカードとともに実物などを持って行き、意味を説明してから10行目までCDを聞かせる。その後、答え合わせをする。

ラフルさんの財布

a



b



c



財布の中に

< a 700円 b 1700円 c 7000円 >

< a クレジットカード b キャッシュカード >

- ② 11行目以降はCDを聞かせた後で、次のような質問をして内容を確認する。

Q：何を書きましたか。

何で書きましたか。シャープペンですか。

ボールペンですか。

- ③ テキスト p. 89 を開かせてもう一度CDを聞かせ、次の表現の意味を確認する。

- ええと…7千円ぐらいです。

「ぐらい」でもよい。具体的に数字を示して7千円ちようどではないことを説明する。

- ほかには？

「何かありましたか。」が省略されている。

- ええと…お金とキャッシュカードだけです。

文型5では「だけ」は種類がそれ1つのものに限って練習している。ここでは、財布にお金とキャッシュカード以外は入っていないという状況が理解できればよい。

- じゃ、ここにあなたの住所と名前と電話番号を書いてください。

「教室の言葉」で学習している。「～てください」は第9課文型2で学習する。

- あっ、ボールペンで書いてください。

手段を表す助詞である。「鉛筆で書きます。」「フォークとナイフで食べます。」などを紹介して、意味を説明する。第12課文型1で詳しく学習する。

- これでいいですか。

自分が書いたものなどを提出する際、だいじょうぶかどうか確認する表現である。「私はこれを書きました。でも、これ、だいじょうぶですか。OKですか。わかりません。チェックしてください。（紙を相手に見せるジェスチャーで）これでいいですか。」などと説明

するとよい。

• はい、けっこうです。

相手の行為について「だいじょうぶだ。問題ない。」ということ伝える表現である。ここでは、出された書類に記入漏れがない、だいじょうぶだという意味で使われていることがわかればよい。次のように教師が書類を出す側（A）と受け取る側（B）の2役を演じて説明するとよい。Aは書類を差し出して「これいいですか。」と言い、Bは書類に目を通すジェスチャーをして「はい、けっこうです。」と言うなどして見せる。

• じゃ、後で連絡します。

ここでは、財布が見つかったら警察官からラフルに電話をして伝えるという意味であることを確認する。

【読み練習】

クラス全体でリピートして読み練習をする。その後、ペアで練習する。時間があれば、ペアで読み練習をする際、学生に小さい紙（ノート）、鉛筆、ボールペンを用意させ、「じゃ、ここにあなたの住所と名前と電話番号を書いてください。」以降の会話を実物を手に取りながら話す練習をさせるとよい。

この本文を学習後、次のようにテキストの練習 e を行う。この課の文型 4 で形容詞の接続を学習する際に自分の持ち物などの形状を言う練習をしているので、時間があれば自分の持ち物を使って本文のディスコースに合わせてペアで言う練習をする。

【練習】

- ① テキスト p. 92 の練習 e をする。クラス全体で例) を読んだ後、学生同士がペアになって 1～3 を行う。
- ② 時間があれば、練習 e のディスコース（1～4行目）を使って、学生のかばんやペンケースなどの特徴を説明させる。相手の学生に実物を見つけたふりをさせ、5行目以降に「B：ありました。どうぞ。」「A：ありがとうございます。」などのやりとりを追加してもよい。

4. 本指導例集に掲載されたもの以外の文型導入の例

文型の導入には、1つの正解があるわけではなく、様々なやり方が考えられる。本指導例集に掲載した指導例はあくまでも一例であり、本校の教師は、それぞれの教師の個性やそのクラスの状況に合わせて様々な導入、練習を行っている。例えば2-2-2「写真を使った導入」で紹介した第23課文型2「～ようになる」の導入では、指導例をアレンジして、使う写真を教師自身の変化や街の変化を表す写真にすることもできる。またまったく違うやり方、例えば絵を使った導入や、やりとりだけで行う導入なども考えられる。そこで、本校の教師が実際に行っている他の導入の例を次に紹介する。

4-1. やりとりだけで行う導入（社会の変化）

まず「社会の変化」について、やりとりだけで行う導入を紹介する。ここでは身近な話題から始め、食べ物や服装、電気製品などの社会全体の生活の変化について学生とやりとりしながら導入する。

導入

① 次のように学生とやりとりをする。

T : 私はゆうべ、焼肉を食べに行きました。S1さんは、何を食べましたか。

S1 : 牛丼を食べました。

T : そうですか。牛丼は人気がありますね。焼肉の店も多いです。でも昔の日本人はお肉を食べませんでした。何を食べていたと思いますか。

S : 魚？

T : そうなんです。魚や野菜を食べていました。昔の日本人の食事は今とぜんぜん違いました。変わりました。日本では150年ぐらい前から、肉を食べるようになりました。

次のように板書して簡単に説明する。

(前) 食べない → (今) 食べる

肉を食べるようになりました。
動詞(辞書形)

T : 前は食べませんでした。今は食べます。変化しました。「食べます」は動詞です。動詞の変化は「～ようになりました」を使って言います。「ように」の前は動詞の辞書形です。ほかに前は食べなかったもの、何だと思えますか。今、みなさんがよく食べるものです。

S : パン？

T : そうです。パンを…(続けるように促す。)

S : 食べるようになりました。

T : じゃ、昔、日本になかったお酒は何でしょうか。

S : ビール。

T : そうです。今は一番人気があるお酒です。ビールを…(続けるように促す。)

S : 飲むようになりました。

T : 変わったことは、食べ物、飲み物だけじゃありません。昔の日本人は、男の人も女の人も子供も着物を着ていました。今は？

S : 服を着ています。

T : そうですね。今は洋服を…(続けるように促す。)

S : 着るようになりました。

T : 昔は、冷蔵庫も洗濯機もそうじ機もテレビもありませんでした。今はいろいろな電気製品を…(続けるように促す。)

S : 使うようになりました。

T : そうです。本当に便利になりましたね。昔の人は大変でした。150年前は車も少なかったです。遠い所へ行くのが大変でした。外国へ行く時は船で行かなくてははいけませんでした。簡単に外国へ行くことはできませんでした。でも今は？

S : 行けます。行けるようになりました。

T : そうですね。みなさんの国も同じでしょう？

前は簡単に行けませんでした。今は行けます。「外国へ行けるようになりました」「行ける」は可能形の肯定形ですね。(と言いながら板書に書き加える。)

(前) 食べない → (今) 食べる

肉を食べるようになりました。
動詞(辞書形)

外国へ行けるようになりました。
動詞(可能形の肯定形)

- ② 続けて学生に国の変化について聞いてみる。
- T : みなさんの国ではどんな変化がありましたか。
- S 2 : 女の人がたくさん仕事をするようになりました。
- T : あっ、日本も同じです。
- S 3 : お金がない人も大学へ行けるようになりました。
- T : それはいいですね。
- ～続ける～
- (この後練習を行う。)

4-2. やりとりだけで行う導入（個人の変化）

次に「個人の変化」について、やりとりだけで行う導入を2つに分けて紹介する。ここでは、まず学生自身の日本へ来る前と来てからの生活の変化を話題にして導入し、次に学生が以前はできなかったが、今はできるようになったことを話題にして導入する。

導入 1

① 次のように学生とやりとりをする。

- T : 日本へ来る前の生活と今の生活を比べてみましょう。前と今と同じですか。同じじゃありませんか。
- S : 同じじゃありません。
- T : 何が変わりましたか。前はしませんでした。でも、今はします。どんなことがありますか。(と言いながら次のように板書する。)

前は_____ませんでした。→ 今は_____ます。

- S 1 : 前は自分で料理をしませんでした。今は自分で料理をします。
- T : そうですね。今は自分でしなくてははいけませんね。
- S 1 : はい。一人暮らしだから大変です。
- T : S 1 さんは、前は自分で料理をしませんでした。今はするようになりました。S 2 さんはどうですか。
- S 2 : 前は自分でそうじをしませんでした。今はします。
- T : 今はするようになりました。どうぞ。
- S 2 : 今はするようになりました。
- T : S 3 さんはどうですか。
- S 3 : 前はお酒を飲みませんでした。今は飲むようになりました。
- T : そうですか。どうしてお酒を飲むようになりましたか。
- S 3 : 友達と一緒に飲みましようと言うからです。
- T : ああ、友達と一緒にお酒を飲むようになったんですね。

② 次のように説明して板書して形を確認し、文をリピートさせる。

- T : 前はしませんでした。今はします。(板書の

→を指して) 変わりました。するようになりました。

(前) しません → (今) します (変化)

前は料理をしませんでした。今はするようになりました。
動詞(辞書形)

- T : 料理をするようになりました。どうぞ。
- S : 料理をするようになりました。
- T : そうじをするようになりました。どうぞ。
- S : そうじをするようになりました。
- (この後練習を行う。)

導入 2

① 続けて、次のように学生とやりとりをする。

- T : もう3か月日本語の勉強をしましたね。日本語がよくわかるようになりました。みなさん、上手になりましたね。前はできませんでした。今はできます。何ができますか。
- S 1 : 漢字が読めます。
- S 2 : 漢字が書けます。
- S 3 : 日本語でちょっと話せます。
- T : いろいろできるようになりましたね。漢字が読めるようになりました。どうぞ。
- S : 漢字が読めるようになりました。

ほかの答えも同様にリピートさせる。

② 次のように説明して板書し、形を確認する。

- T : 前はできませんでした。今はできます。(板書の→を指して) 変わりました。できるようになりました。

(前) できません → (今) できます (変化)

前は漢字が読めませんでした。今は読めるようになりました。
動詞(可能形の肯定形)

(この後練習を行う。)

このように、どの文型においても様々な導入のやり方が考えられる。本指導例集は、その1つのヒントである。それぞれの教師が自分に合ったやり方で、学習環境やその時の学習者に最も適した導入を考えることが重要であろう。

5. 本指導例集に掲載されている「指導例」以外の資料について

本指導例集は、冊子とCD-ROMからなっており、CD-ROMには前述したようにテキストの全文型・全本文についての285の指導例がPDF形式で収録されている。冊子には、CD-ROMに収録されている「指導例」の一部のほか、以下のような参考資料が掲載されている。

①凡例

文型、本文それぞれの指導例を見る際に必要な項目について説明したものである。

②「指導例」「テキスト」対照目次

テキストの課と文型、本文の番号およびページと、それらに対応する指導例のページを一覧にしたものである。これによって、必要な指導例のページをすぐに見つけることができる。

③「テキスト」と「練習問題集」についての紹介

『文化初級日本語Ⅰ テキスト改訂版』『文化初級日本語Ⅱ テキスト改訂版』の対象学習者およびテキストの特徴、構成などとともに、「練習問題集」について紹介したページである。

④文型・意味一覧

テキストに出てくる文型とその意味を一覧表にし、必要な項目を探しやすいようにしたものである。

⑤関連文型一覧

『文化初級日本語Ⅰ テキスト改訂版』『文化初級日本語Ⅱ テキスト改訂版』および『文化中級日本語Ⅰ』で学習する文型の中で関連のあるものを文法項目ごとにまとめた一覧である。たとえば、「～ている」は初級では、第10課文型2、第11課文型1、第19課文型5、第26課文型1で、中級Ⅰ（『文化中級日本語Ⅰ』）では、第3課文型1と文型4、第6課文型1と文型4で提出されているが、この関連文型一覧を見ればそれぞれの意味や用法の違いが一目でわかるようになっている。

⑥『文化初級日本語』で教える際の参考例

本校の対象学習者や初級の標準的な学習時間、カリキュラム、コマ割りについて具体例を挙げて記述した。

以上が冊子に掲載されている参考資料であるが、これらのうち、④の文型・意味一覧や⑤の関連文型一覧を参照することで、他の教科書で教える場合でも、必要な文型の指導例を簡単に探すことができ、授業を行う際のヒントが得られる。また、⑥の『文化初級日本語』で教える際の参考例のページを参照することで、各課を指導するのに必要な時間数や、各課の授業の基本的な流れ、本校の1週間のスケジュールの例などを知ることができる。

6. おわりに

本指導例集は、初級の授業を行う際にどのような教材を準備し、どのような言葉でやりとりをし、どのような練習をすればよいかをはっきりとイメージできるようにできるだけ具体的に授業の流れを記述したものである。本指導例集を読めば教師の経験のあるなしにかかわらず、まだ自分が教えたことのない未知の学習項目の授業であっても、授業の展開の様子を目の前に思い浮かべることができると思われる。ただし、これらの指導例はあくまでも例であり、この通りに授業が行われることがベストであるとは限らない。むしろ同じ学習項目の指導であっても、対象学習者の国や地域、適性、またクラスサイズなどにより、様々な工夫を加え、それぞれの教師の個性を生かしてアレンジしてこそ、よりよい授業が実践できるだろう。

注

- (1) 本校の対象学習者は日本の大学や専門学校などに進学する予定の学習者である。4月中旬から初級の学習を始めた場合、通常9月までの約4か月半で『文化初級日本語Ⅰ テキスト改訂版』『文化初級日本語Ⅱ テキスト改訂版』の学習を終了する（ただし、8月は夏休みである）。週25コマ（1コマは50分）の学習時間のうち、1日2～3コマ、週にして10～15コマが『文化初級日本語Ⅰ テキスト改訂版』『文化初級日本語Ⅱ テキスト改訂版』の内容の学習にあてられる。

資料1 『文化初級日本語Ⅰ テキスト改訂版』第7課本文1

だい なな か
第7課さい ふ お
財布を落としました。ほん ぶん
本文1 さい ふ お
財布を落としました。がくせい かいかん
(学生会館で)

ラフル：あのう、財布を落としました。
先生、私の財布を見ましたか。

かいかん せんせい
会館の先生：いいえ。

ラフル：そうですか…。

こうばん
(交番で)

ラフル：すみません。

けいさつ かん せい
警察官：はい。何ですか。

ラフル：あのう、財布を落としました。

けいさつ かん せい
警察官：財布ですか。どこで落としましたか。

ラフル：わかりません。

けいさつ かん せい
警察官：今日、どこへ行きましたか。

ラフル：ええと、朝、郵便局へ行きました。

けいさつ かん せい
警察官：その時、財布はありましたか。

ラフル：はい、ありました。切手を買いました。

それから、うちへ帰りました。

けいさつ かん せい
警察官：そうですか。部屋の中を捜しましたか。

ラフル：ええ。でも、ありませんでした。



資料2 『文化初級日本語Ⅰ テキスト改訂版』第7課本文2

第7課

本文

2 黒くて小さい財布です。



警察官：どんな財布ですか。

ラフル：黒くて小さい財布です。

警察官：財布の中にくらありましたか。

ラフル：ええと…7千円ぐらいです。

警察官：そうですか。

ラフル：キャッシュカードもありました。

警察官：お金とキャッシュカード…。

ほかには？

ラフル：ええと…お金とキャッシュカードだけです。

警察官：わかりました。

じゃ、ここにあなたの住所と名前と電話番号を
書いてください。

ラフル：はい。

警察官：あっ、ボールペンで書いてください。

ラフル：はい…。

これでいいですか。

警察官：はい、けっこうです。

じゃ、後で連絡します。

ラフル：よろしくお願ひします。

